

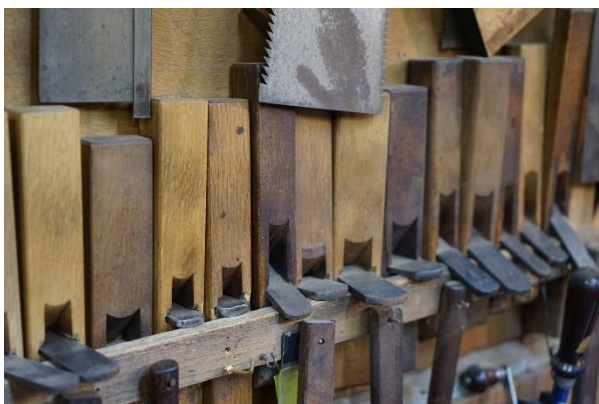
伊藤唐木

三代目 伊藤 俊夫さん

四代目 伊藤 智弘さん

100年の歴史を誇る
機械より精密な“技”

「大阪唐木指物」とは、漆を重ねることで鏡のように滑らかな光沢を持つ表面と重厚感ある味わいのある色合いが特徴の、経済産業大臣から指定されている伝統的工芸品。貴重な紫檀、黒檀、花梨などの唐木を使い、釘やねじを使わずに木を組み合わせる。



▲ 壁一面に並ぶ“かん”。
最適な一つを選び抜く。



▲ 三代目 伊藤 俊夫さん(左)
四代目 伊藤 智弘さん(右)

伊藤唐木では100年以上にもわたり手作業だけで茶棚や花台などの調度品を製作している。寸法を合わせるのも機械やメジャーなどを一切使わず、1mmの隙間もなく木と木を合わせていく。

唐木家具の修理の注文も全国から寄せられる。大切に使えば200～300年使えるという。先祖代々受け継がれている家具たちを、職人の技で甦らせ、また次の世代へと繋いでいく。



漆塗りで光を放つ花台 ▶

2019年 5月号

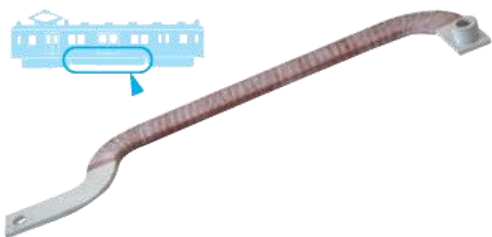
紡織機器 バネ工業株式会社

代表取締役社長 山田 康光さん



町工場が作る配線バーを
搭載した鉄道車両は、今日も各地を走り抜ける!

昭和19年に設立。インバータ装置に使われる配線バーを製造。かつて、紡織機械の部品である板バネ加工品を製造していたため、社名にその由来を残している。鉄道車両の床下のボックスには様々な機器が配置されている。それらの機器は電気制御を司るインバータ装置を通し車両とつながっている。そのつなぎ役として以前はケーブル電線が使われていた。しかし、何本も線を這わせるスペースが必要で、配置の際、切ったり曲げたりの作業を現場でしなければならなかった。



▲ 同社が開発した銅製の配線バー。
高い通電性、絶縁性を持つ。



▲ メッキ前の状態。
同じ形状のものなら重ねることができる。

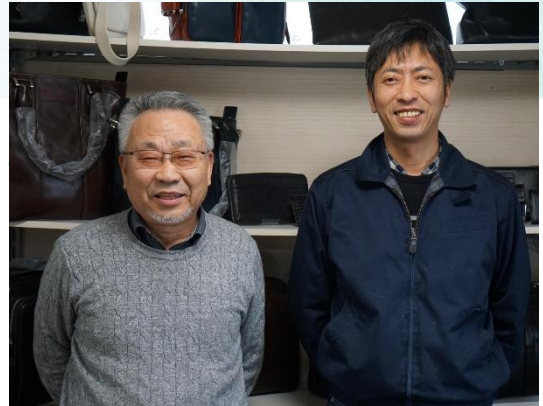
そこで同社は、機器の間を迂回する曲線を付けた配線バーを開発。省スペース化に成功。

また、受注した設計図どおりにパーツ化でき、誰でも配置できるのが強みだ。メッキや絶縁までの進化しつづける一貫加工で、大手からも厚く信頼を集めている。

株式会社 シノダ

代表取締役 篠田次郎さん
専務取締役 篠田英志さん

カバンを一から自社で製作。
高い技術でフルオーダーにも応える！



▲ 篠田次郎さん(左)
篠田英志さん(右)

平成30年に個人商店から組織変更し、「株式会社シノダ」に。多品種少量生産で革のカバンを製造する。OEM（他社ブランド製品の製造）が中心だが、シノダのオリジナル製品やリメイク、人からのフルオーダーにも応える。革などの材料の仕入れから、裁断、縫製、金具の取り付けに至るまで、製品完成までの全工程を自社で行う。



▲ 英志さんが技術認定1級を取得した時の課題のバッグ。ひだや縫製の精巧さなど細かなチェックが入る。



▲ 全工程を家族と数人の社員で分担

常に変化していくデザイン。お客様のニーズに応えるため、日々技術を磨く。大阪府知事賞をはじめ、数々の賞を受賞している。専務の英志さんは、日本鞆ハンドバッグ協会の技術認定1級を取得するなど高い技術力を誇る。

吉持製作所

代表 吉持剛志さん

見学・体験も
ウェルカムです!!
事前に連絡
くださいね。

厚さ1mmの金属板が
“ヘラ”のマジックで七変化



「ヘラ絞り」とは、陶芸家がろくろの上で土を自在に操るように、回転する円形の金属板を“ヘラ”を押し当てながら思い通りに形を変えていく技術のことである。

昭和45年創業。吉持剛志さんは、弟の道雄さんとともに、父から会社を引き継いだ。照明シェード、給食用のバケツ、植木鉢など、左右対称のものであれば、あらゆるものを作り出す。剛志さんは、自作のHPでヘラ絞りの魅力を伝えたり、他業種の職人とコラボして新たな作品を生み出したり、自社工場での体験会を実施したりと、「ヘラ絞り」への情熱が絶えることはない。



▲ 銅製のビアジョッキ



▲ 証明シェード

自作のヘラ ▶



わずか1分で
カップが完成!

▲ セットした丸い金属の板をヘラで絞っていく道雄さん。力加減がミソ。
わずか1分でカップが完成!

2019年 8月号